

令和 6 年度 市政懇談会 開催結果

○日 時 令和 6 年 8 月 23 日（金）午後 6 時 00 分～午後 8 時 00 分

○場 所 桐生市保健福祉会館 5 階 503 会議室

○出席者 19 名

【市 民】9 名

桐生市 P T A 連絡協議会 会計	池口 志穂
桐生保育協議会 保護者代表	周東 菜々子
飯山千里建築設計事務所 代表	飯山 千里
群馬大学大学院理工学府 教授	金井 昌信
未来創生塾 副塾長	小島 由美
一般社団法人桐生建築士会	中野 久美
N P O 法人キッズバレイ 代表理事	星野 麻実
N P O 法人キッズバレイ むすびすむ桐生担当	山本 祐司
桐生整染商事株式会社	川上 由綺

<欠席者>

有限会社 C O C O - L O 代表取締役社長	雅樂川 陽子
----------------------------	--------

【桐生市】10 名

市 長	荒木 恵司
<事務局> 共創企画部長	西條 敦史
共創企画部企画課長	橋本 頼孝
共創企画部企画課移住定住推進室移住定住推進担当係長	馬場 秀穂
共創企画部企画課企画戦略担当係長	曾我 延博
共創企画部企画課企画戦略担当	坂主 樹哉
子どもすこやか部子育て支援課長	萩原 利明
子どもすこやか部子育て相談課長	関沼 八千代
産業経済部商工振興課長	石原 智貴
教育委員会教育部参事	渡邊 真宏

○報道関係 2 社（上毛新聞社、桐生タイムス社）

○傍 聴 者 1 名

○懇談会内容

1 開 会 [開始：午後 6 時 00 分]

2 あいさつ

- ・荒木市長から挨拶。

3 自己紹介

- ・出席の市民 9 名が、順に自己紹介。

4 議 題

- ・事務局から桐生市の状況等を説明した上で、「(1) 仕事」「(2) 子育て・教育」「(3) その他（結婚・暮らしなど）」の3テーマについて、市長と市民が意見交換。

(1) 仕事について

(意見)	子育てをしていくためには、長く続けられる仕事があることが重要である。 働き方の多様化が進んでおり、近年は特にリモートワークが普及し、移住もしやすくなった。 そのような中で、桐生市はスタートアップ企業に選ばれやすいまちだと思う。(株)シカクやセレクトショップなど、私の周囲には、何かを試すために桐生市を選んで移って来た経営者がたくさんいる。 桐生市は、仕事と暮らしを区別せず「公私融合」させるライフスタイルの人に適している。私の夫は走ることが趣味で、トレイルランニングに打ち込んでいる。その夫の話では、桐生市の吾妻山は非常に練習しやすいことで有名であり、市外の遠方の選手も練習しにわざわざ吾妻山まで足を運んでいる。そのような自然環境があることは桐生市の強みである。 また、桐生市は土壌環境が良く、農業も行いやすい。近年、異業種から転職して農業を始めたり、副業や趣味で農業を始めたりする人が増えている。職業にできなくても、自分が食べるものは自分で育てたいと考える人が増えており、知り合いにも農業や家庭菜園を始めた人が多い。私も家庭菜園を行っている。 桐生市は、そういった仕事と暮らしを融合させる働き方を試しやすい地域である。
市長	「仕事と暮らしの融合」というキーワードをいただいた。それが桐生らしさに繋がるという話だった。 冒頭の事務局の説明では、社会増減がマイナスではあるものの、令和5年度は-198人であり、令和元年度の-645人と比べれば、減少幅は小さくなってきている。これは「むすびすむ桐生」の取組も関係していると思う。
(意見)	私は子どもが二人おり、それぞれ黒保根学園と黒保根保育園に通っている。普段は黒保根町で本業をリモートワークでしており、その傍らでNP0 キッズバレイの立場では「むすびすむ桐生」を担当している。 先ほど「仕事と暮らしの融合」という話があったが、そういった桐生市の良さは言語化が難しく、定量的にも示せないなので、人への説明が難しい。 しかし、試しに一度来てみると、一気に取り込まれて、緩やかなつながりの中にいるうちに、気が付いたら自分のやりたいことが見つかっている。それは必ずしもお店ではなく、なんらかの方法であったり、農業や林業などであったり。むすびすむ桐生としては、引き続きこういった移住者の引き込みや、言語化の課題にも取り組んでいきたい。 リモートワークに関しては、私と妻の二人ともリモートワーカーであり、東京で十万円以上の高い家賃を払い続けることに意味を感じなくなった。住む場所を考える中で、私の故郷に近く、教育環境にも魅力を感じる黒保根に「教育移住」した。 当時の妻は「移住という感覚ではない」と明確に言っていたが、それは非常に大事

	なことだと思う。「移住」だと思うと途端にハードルが上がり、そこで一生過ごさなければならぬ気持ちになって、簡単には決められなくなる。そうではなく「引っ越し」くらいの軽い感覚で来て、もし合わなければまた引っ越せば良いと思っていれば、気持ちが軽くなる。 私は実際に黒保根に引っ越してみた結果、黒保根保育園も黒保根学園も素晴らしく、移住して良かったと思っており、黒保根に定着しつつある。 仕事面の話をすると、最近はリモートワークからの揺り戻しで、出社をさせる企業が増えており、週1回程度の出社とリモートワークを組み合わせたハイブリッドワークの形態をとる企業が多い。 この状況は桐生市にとってチャンスだと思う。 これまでのフルリモートワークの状況では、中山間地域や山奥にある小さな集落に住むことが流行したが、ハイブリッドワーク化によって東京や大阪に通うことが前提となると、アクセス性が重要になる。 桐生市は、ハイブリッドワーカーの視点で見ると、東京へのアクセスが良い便利なまちである。私自身、月に1回東京に通っているが、東武鉄道1本で東京に行けるのはすごく快適で、料金も安く、一度体験するとその便利さが分かる。特急のリバティでは、無料車内Wi-Fiや電源も使うことができ、移動しながら快適に仕事ができる。この便利さ・快適さを売りにして、ハイブリッドワーカーを取り込んでいくのは方策の一つとして有効ではないかと思う。 リモートワーカーに固執しすぎることなく、まちなかでは、起業や店舗開業の支援にも注力し、黒保根では、仕事をしながら副業等の活動や農業もちょろどよくできるということを押し出していくと良いと思う。
市長	むすびすむ桐生の特徴は、桐生市でお店を開いたり起業をしたい人をターゲットに絞った移住定住の相談窓口だということであり、まさに今言われたようなことが、むすびすむ桐生の中でも行われていると思う。 キーワードとして「リモートワーク」と「東京へのアクセス」をいただいた。
(意見)	周囲の母親を見ると、働いている人が多く、延長保育や学童の利用者も多い。 保育園の先生から聞いた話だが、保護者から「預かりは何時までか」、「良い保育を受けられるか」、「送迎バスはあるか」といった質問を受けることが多いそうである。 近年は物価が上昇し、子どもが成長すれば更にお金が必要になることから、共働きでお金を稼ぎたいと考える女性が多いため、保育や学童の内容をより充実させて、女性が安心して働ける環境をつくることが重要である。 年々猛暑が厳しくなり、熱中症警戒アラートによって、子どもは学童に行ってもほとんど外で遊べず、プールにもあまり入れていない。学校側は工夫して、部屋や図書室を開放してくれているが、夏休み期間、8月末までの1か月半もの間、学童に預ける中で、そのほとんどを部屋の中で過ごすのは、ありがたいことではあるが、もう少し内容が充実して子どもにたくさんの思い出を残したり良い教育を受けさせたりできれば、売りにもなると思うし、母親も安心して働けると思う。 女性の働き方については、都内だと転職が当たり前で、キャリアアップや給料アップを狙っていくのが普通だと思うが、地方だとその感覚はない。 地方では、給料アップを目的とした場合に転職先の選択肢に入る企業は少なく、キ

	キャリアを重ねるというよりは、自分のライフスタイルに合う会社であることや、働きやすい環境であるということが、優先条件になる。 手に職があるわけではない普通のお母さんの場合は、業種を選ぶことができず、幅広い求人の中から自分にもできることを探す必要がある。好きなことを仕事にできれば幸せだが、そうではなく、例えばパートを希望した時に、自分にもできる仕事内容で、かつ、先ほど述べた優先条件にも合う求人を探そうとすると、市内だけでは非常に限られてしまう。大規模で綺麗な商業施設などが充実している他市に行った方が、市内で働くより労働環境も待遇も良いというケースが非常に多いと感じる。桐生市の女性が、正規・非正規問わず、自分のライフスタイルに合った働き方を選択できるようになれば良いと思うし、企業側においても、例えば週5日勤務しか認めなければ、女性の就職先の選択肢に入らないので、柔軟に対応してもらいたい。 女性が自分のライフステージに応じた働き方を選択し希望を叶えられるようになれば、安心につながるということを、色々な方から相談を受けて感じている。
市長	保育環境の充実は、なるべく目に見えて分かりやすい形で作り上げていきたい。 女性が自分のライフスタイルに合った働き方を選択できる環境づくりも重要だと思うので、今後の事業を検討していくにあたって、引き続きアドバイスをいただきたい。
(意見)	勤務先は東京のままで、空き家になった桐生市の実家を改装して住所を移し、リモートワーカーになった方が、私の周囲にもいる。桐生市はそういう方に適している場所だと思う。東京までの距離が近く、ハイブリッドワーカーなどが住みやすい場所であると同時に、まちの中心部から数分で山の中にもアクセスできる。都会に近くて田舎暮らしも楽しめるというのは、他市にはない桐生市の強みだと思う。 また、まちなかに全ての仕事があるわけではないので、例えば、車で30分以上かけて通勤しながら子育てをすることになった場合に、必ずしもまちなかに住まなくてもよい状態を作れないかと思う。 例えば、全ての学校を統合して1つの学校にして、全員をスクールバスで送迎すれば、まちなかに住まなくても安心して子育てができる環境になる。クラス数が増えればクラス替えをできるようになるので、いじめに遭ったりクラスに馴染めない子どもが出た場合に、他のクラスに移れるというメリットも出てくる。 学校にそのような環境があれば親として安心できるのに加えて、まちなかだけでなく黒保根や梅田など、桐生市のどの場所に住んでいたとしても同じ教育が受けられて仕事もできるということになるので、家も買いやすくなり、すごく良いと思う。 もう一つ、子育てをしている人の仕事のあり方についてだが、手に職があるとか、職場の理解のもと休暇を柔軟に取得できたり育休後の復帰が保障されたりしている方ばかりではないので、子どもが保育園や学校に行っている間の数時間だけ働いて、しかも毎日ではなく週に数日だけ働けるような環境は、子育て世代の方から非常に求められている。 もし、学校が統合して一つの大規模校ができ、地域の食材を使った給食センターが学校の中にできたとしたら、そこでお母さん方が働けないかと思う。フルタイムで毎日必ず行くのではなく、週に2日や3日だけ働きたい方をたくさん雇ってシャッフルしながら働いてもらえれば、子どもの発熱などで急に休まなければならない場合にも他の人が柔軟に代われるようになると思う。

	そのような仕事を作ることと、子どもを安心して学校に通わせられるということが、学校の統合という一つの方法の中で同時に達成できればよいと思う。
市長	残念ながら本日出席が叶わなかったが、雅楽川さんが、今のお話にあったような、女性が柔軟に働ける環境づくりに取り組まれていると思うので、今の話ともリンクさせながら良い方向に持っていければと思う。
(意見)	子どもが市外の大学に通っているが、就職のことを考えた時に、無理矢理桐生市に戻って来てほしいとは言えない。進学や就職で外に出してしまうのは致し方ないが、せっかく大学で色々な知識を学び視野を広げた学生が、桐生市を離れたまま戻ってこないのは大きな損失なので、外の世界で色々なスキルを身につけて更に成長した上で、ライフステージが変化した時に桐生市に帰って来やすいような状況を作ってもらえれば、良い方向に向かっているのではないかなと思う。 また、女性にとっては、給料がそこそこだったとしても、仕事にやりがいを感じられれば夢中になれると思うので、そのような企業を増やしたり、あとは大学生の意見にもあったが、スタートアップ支援や大手の研究所の誘致に力を入れるべきだと感じる。
市長	桐生市や市内企業が持っているものを生かして、そこに魅力を感じてくれる人を増やすためにしっかりと取り組んでいきたい。
(意見)	参加する方の名簿を初めて見た時に、このメンバーで仕事のことを語っても仕方がないのではないかなと思った。 理由は、ここにいる皆さんはそれぞれ自分にしかないスキルを持っていて、自分の仕事ができている方達だからである。しかしながら、大部分の市民はそうではなく、特別なスキルがなくてもできる仕事に就いて生活していきたいはずであり、そういう人たちが働きやすい環境づくりが必要だと思う。これまでの行政には、ごく普通の人が働きやすくなるような取組はあまりなかったのではないかなと思う。 先ほどの意見にもあったように、すきま時間を使って皆でワークシェアする仕組みを市全体できちんと作ることを、一番初めにやるべきだと思う。今は高齢者の方も含め、誰でもスマホを持っている時代なので、スマホを通じてリアルタイムにワークシェアを行う仕組みを作り、100人くらいで試行的に始めてみてはどうか。 同級生などを見ていると、「桐生市外でしかやりたい仕事ができない」という理由で出て行く人が多いが、実際には、その場所である必要がなく、どこでもできることしかしていない人が圧倒的に多い。そういった人達に市内を選択してもらうための情報提供や支援体制の強化も必要だと感じる。
市長	まち全体ですきま時間を補っていくという貴重な意見をいただいた。参考にさせていただきたい。
(意見)	私は会社に勤めているわけでも、お店を開いているわけでもなく、個人事業主として働いているが、デスクワークをしているフリーランスが働きやすい環境も必要だと感じている。フリーランスの方は意外と多いので、少人数のチームで活動できるような事務所を確保する際の支援をできないだろうか。例えば、市営住宅に空きがあれば、そこをオフィス用に貸し出すなど。 子育て中も、フリーランスだと自分で調整ができ非常にコントロールがしやすいという面もあるので、フリーランスの方への支援も検討していただけるとありがたい。

(意見)	私は県外出身で、大学進学で群馬に来て、夫と出会ったことから、そのまま住もうと思って桐生市に移住した。その時、桐生市に就職先を見つけるのに苦労した。 高校の教員免許を持っており、教育実習に行ったことがあるが、そこで高校生に夢を聞いたときに、ほとんどの生徒は夢を持っておらず、何でもいいからとりあえず働ければ良いという人が多かった。 桐生市はせっかく高校の数が多いので、何でもいいと思っている人を囲い込んで桐生市に残ってもらえるような働きかけをするべきだと思う。 桐生市は製造業が多いという話だったが、実際に何が作られているのか、私たちのほとんどは知らない。作っている製品を企業が高校生や中学生に見せて教えたり、桐生市の住みやすさを大人が生徒に教えたりするような情報支援・関係づくりがあれば、就職活動を始めた時に、後から思い出して、お世話になった人にもう一度話を聞きに行ってみようかな、桐生市に残ってみようかなと思えるようになる。 やりたいことや夢がないからとりあえず東京に行こうと思うのではなくて、やりたいことがないけど桐生市が住みやすく、お世話になった人もいて居心地が良いから、とりあえず桐生市に残ろうと思ってもらえるための取組が必要だと思う。 とりあえず働いていく中で、人との関わりが増えていけば、やりたいことも自ずと見つかっていくものだと思うので、そういった中高生への情報支援や関わりづくりの事業を始めると良いと思う。
市長	今までに我々が忘れていた意見をいただいた。参考にさせていただく。
(意見)	私は20代の時に数年間東京で暮らしたことがあり、その後桐生市に戻ってきた。もし桐生市に魅力がなければ、そのまま東京で暮らし続けたと思うが、戻ってきてから桐生市の良さを感じる人が多い。中にいる人は意外とその魅力に気が付いていない。 私が桐生市に戻った理由は、自然が多いからである。東京にも高尾山などの自然があるが、桐生市と比べると全然違う。子ども時代から桐生市の豊かな自然に触れてきた身としては、それが魅力として刷り込まれており、本能的に戻って来たい部分があるのだと思う。 私自身、若いころは、桐生市は刺激が足りないと思っていた。それなのに何故戻って来たのか自分自身も不思議に思っていたが、自然が豊かであるということは、それだけで人を惹きつける力があるのだと思う。子育てをする上でも、桐生市の自然環境はありがたいと感じる。 私の夫は桐生市外出身であり、今まで住んだ地域の中で桐生市が一番田舎だと言っていたが、現在では私よりも桐生市に馴染んでおり、一番住みやすいと言っている。 仕事の面でいうと、私の夫は運よく桐生市で仕事を見つけることができたが、もし仕事が無ければ市外を選んでいただろうと思うので、その点はやはり桐生市の課題だと思う。
市長	私も学生時代とそれから3年間を東京で過ごした。桐生市に帰省した時に、新桐生駅で降りて、錦桜橋を渡って、渡良瀬川と赤城山、吾妻山を見ただけで、桐生市に絶対に戻りたいと思った。 仕事はどこか探せばいいという感覚だった。桐生市に仕事がないと皆さんよく言うが、自分が本当に努力をして好きな仕事を探していけば、全く見つからないことはないのではないかと思っている。本当にその場所が好きで、そこで生活したいという強い思いさえあれば、自分で探して見つけていけるのではないかという思いがある。

(2) 子育て・教育について

(意見)	ここに来る前に、市のホームページをチェックしてみたところ、私が出産した時には無かった「出産・子育て応援給付金」や様々な支援が今はあることが分かった。こういう情報は自分から拾いに行かなければ分からない。そうではなく、知らない間に広まっているぐらいの方が良いと思うので、もっと積極的にPRしてほしいと感じる。 教育の面については、保育園は色々なところを見学して自分が気に入ったところに通わせることができるが、小学校は選ぶことができず、住所の近くの学校に自動的に決められてしまう。また、小学校ごとの違いや特色も調べても情報がほとんど無い。唯一情報が出てきたのが、黒保根学園で特色ある教育を行っているという情報だった。 現代は少子化だからこそ、親は自分の子どもに色々なことをしてあげたいと思い、教育にも力を入れたいと思っているので、選べるようにしてもらえるとありがたい。 実際に、気に入った保育園に通わせるために移住してきたという話もよく聞くので、小学校についてももっと特色を出していただき、選べるような仕組みにってもらえると桐生市の魅力になると思う。
市長	黒保根学園については、小規模特認校制度を導入しているため、従来の小中学校とは異なり、黒保根在住者に限らず、桐生市内のどこに住んでいても、希望者は通うことができるのが特徴であり、面白い点だと思う。 現在、他の小中学校の適正配置についても、地区の方々のお話を伺いながら検討を進めている。 昨年の出生数が380人というデータがあるが、現在小学校が17校ある中で、1学年2クラスを維持しようとする、半分以上の小学校が不要になってしまう。 そういった現実を踏まえて、子ども達が健やかに育つための環境をどうやって実現するのかを考えていけば、自ずと方向性は決まってくると思う。
(意見)	妊娠時や出産時に、支援制度などが書かれた書類を市からたくさんもらうが、見ている暇がないので、結局利用できずに終わってしまう。いざ利用しようと思ってもどうすればいいのか分からず、電話をかけようにも、それで子どもが起きてしまったらなどと色々考えてしまい、利用が難しい。 そのため、紙で渡すだけでなく、例えば、子どもの健診の時に、事業の紹介をしてもらえると良いと思う。広い会場で待ち時間もあり、皆が集まっているので、そこでお母さんに声をかけて教えてもらうだけでも、利用するきっかけになると思う。 もう一つお伝えしたいことは、出生届を出すときに、わざわざ保健福祉会館まで行かなければならないのが大変である。生後2週間の子どもを連れてあちこちに行く必要のある現状をどうにかできないか。 小児科に子どもの予防接種に行った時に、他のお母さんが福祉医療受給者証を持っていないことがあった。保険証をもらった後に、受給者証をもらうためにまた行く必要があることをそのお母さんは知らず、小児科の事務の人から何故持っていないのかと冷たい対応をされていて気の毒だった。初めて子を持つお母さんの場合、知らないことだらけですごく神経質になっており、様々なストレスにさらされているので、少しでも分かりやすくしたり、手間を減らしたりして、皆でお母さんを温かく守れたら良いと思う。

	例えば、新庁舎に建て替わるのを機に、窓口を今よりも分かりやすくして、声かけをもっと丁寧に行うなどはすぐできると思う。
(意見)	中学生の娘がいるが、保育園の時も、小学校でも学童でも、すごく充実した環境で育ててもらえ、感謝している。 保育園の時は、散歩などで歩いてすぐ自然の中に行ける環境だったが、東京とかだと無理なので、桐生市のそういう環境で子育てをできたことは、すごくありがたい。 学校の先生方も一生懸命やってくださっており、学童でも、他市の学童の状況を聞き比べてみると、人材や熱心さが全く異なり、桐生市はとても手厚いので、桐生市で子育てをして良かったとすごく思っている。 しかし、桐生市の学童は、人材は素晴らしいが、空間が少し窮屈でもったいないと思っているので、今後に期待したい。 例えば、お菓子のパックがおやつに出る学童よりも、有機野菜で作ったおやつが出たり、木の空間やお庭があったりする学童の方が魅力的である。学校と同じくらい長い時間を過ごすので、学童がそういう場所であれば、保護者はすごく安心して仕事をできると思う。学童の環境の充実は売りになり、教育移住にも繋がると思う。
(意見)	4つ提案がある。 1つ目は、桐生市の規模であれば、学校は小中一貫校1つだけで良いということ。 保護者の心理としては、特色ある教育よりも、綺麗な校舎のある学校に子どもを通わせたいと思うものなので、見栄えの良さで惹きつけることが大事である。 この仕事をしていると、どこに行っても「特色ある教育を行っている」と言われるが、実際にはそれほど特色がない場合がほとんどである。特色がなくても特色だと皆言うので、見た目で惹きつける方が効果的ではないかと思う。 2つ目は、成績トップレベルより少し下の層の生徒を狙うということ。例えば、まず、小中あるいは中高の一貫校をつくる。普通だとそこに成績トップの生徒を集めたがるところだが、それだと市外の大学に行かれてしまうので、成績3番手くらいで素養の良い生徒が行けるような学校があると嬉しい。その上で小中高大で一貫して市内で繋げていける仕組みを作っていったらどうかという提案である。 3つ目は、先ほどの学校の話と同じだが、学童や保育園も全部一か所に集めて、1つだけで良いのではないかということ。 4つ目は、サマースクールを実施してほしいということ。私は小学1年生の子どもがいるが、妻が働いていないので夏休みは学童に通えないのに、夏休みが1週間も伸びてしまい、家族全員で愕然としてしまった。長い期間団体生活を送れるようなサマースクールと学童のセットを実施していただきたい。 サマースクールにいきなり行くのは怖いので、お試し期間を設けてほしい。試しに子どもを通わせてみて、子どもが気に入って友達もできたら、仕事はリモートでできる人たちに桐生市に来てもらう。桐生市の自然が豊かで保育園や学童が充実しているという皆さんの共通認識があるので、それを最大限に活用して、3日間から1～2週間のお試し期間を設けて、桐生市の子育て環境を知ってもらう機会をつくると良い。 また、子どもを送り込むことでお母さんの手が空くのであれば、すきま時間でバイトとして少し手伝ってもらったり、ワークシェアリングしたりしてはどうですかということとセットで売り込んでいくと、桐生市の特色になると思う。

(意見)	一度市外に出ても、仕事があり、桐生市に誇りを持っていれば、戻ってくると思う。 特色ある教育にも関係するが、群馬県や国では、「非認知能力」、いわゆる学力だけではない、テストで計れない見えない力がすごく重要視されている。 そういった力は、体験から育まれるものだと思う。未来創生塾では「感性を育む」ことを目的として、体験を軸とした教育活動を行っているが、この「感性」も「非認知能力」の一部である。桐生市からの補助で12年間続けているが、これからもっと普及拡大してアピールしていくべきだと思っている。 今、ウェルビーイングが非常に注目されているが、それを感じ取って持続していくためには、感性や非認知能力が重要であり、そういった能力を持たない人は感じ取ることができないと思うので、「体験を軸にした教育」をしっかりと整備していくことが必要であると考えている。 保育や学童、学校の環境の良さをアピールしていくと同時に、内面磨きにも力を入れてパッケージ化すると良いと思う。
(意見)	私の母校でもある北小学校は重伝建地区にあり、群馬大学が近く、山々や桐生が岡公園、遊園地も近い。西宮神社のお膝元でもあり、歴史を感じることができる場所である。そんな場所にある学校の校舎が、鉄骨で味気ないのは残念である。もしそれが木造の少し変わった校舎だったらすごくワクワクできる。そして、もしそこに桐生中の子どもがスクールバスで集まるような学校になれば、メディアにも注目されるので、コマーシャル性も高い。 学校の建物が素敵であったり、環境が良かったり、教育方針が少し変わっていたりすると、親は子どもをそこに入れたくなるので、移住も増えるはずである。 木造校舎の中で何をするかというと、部屋を一つひとつ仕切らないような開けた教室で、最近話題のインクルーシブ教育の内容を取り入れたような教育を打ち出していくと、周りから見て桐生市が魅力的に見えるようになると思う。 先ほど仕事の分野でも話したが、桐生市のどの地区に住んでいても同じ学校に通えるのは親にとってもメリットであり、安心して子どもを通わせられる。バスやMAYUなどの公共交通を使いながら、子どもだけでなく、親も一緒に乗って仕事に行けたら素敵だと思う。 子育ての分野については、桐生市の歩道は段差が多すぎて、ベビーカーや車いすを押して歩くことが難しい場所が多い。今、重伝建地区の道路工事が進められているが、車道から歩道に対して数センチメートルの段差で作られているようである。本町通りの西側に関しては、住宅や店舗の位置が道路レベルよりも15センチメートルくらい高い状況になっていると思う。 これからどのように道路が作られていくのか非常に気になる。重伝建地区は骨董市などのイベントが行われ、子どもを連れて遊びに行きたい場所なので、ベビーカーを押して歩ける道になるのか、子育てをしている人にとって非常に重要なことだと思う。 また、子どもが自転車に乗り始めると、桐生市内に自転車の練習場所がないことに気が付く。前橋市には広くて自転車が走りやすい場所がたくさんあるので、私の子どもが自転車に乗り始めた時は、西桐生駅から電車で自転車を積んで前橋まで持っていく、前橋の公園で自転車の練習を行った。桐生市も自転車の練習ができるような場所を整備し、赤ちゃんからお年寄りまでが安心・安全に暮らせるような街になることが

	重要だと思う。 子どもがコンクリートの冷たい壁に囲まれた四角い部屋ではなく、木の優しいぬくもりに包まれた環境で教育を受け、小中一貫で9年間、あるいは高校まで12年間の長い年月をそういう環境で過ごしていけば、1回は外に出たとしても、自分が子育てをするようになった時に、桐生市に帰って来たくなると思う。 そういう情緒教育に力を入れていくことも、Uターンを促すためにはすごく大事な要素になると思う。
(意見)	中学生・高校生・大学生を対象にユースセンターを週に1回開催しているが、地域に彼らの居場所がすごく少ないと感じている。 私が高校生の頃は、ゲームセンターなどの集まれる場所があり、高校生がなんとなく街中にいて、お店の前に自転車が並ぶ光景があちこちで見られた。今は集まれる場所があまりないと思う。学生にまちの中に出てきてもらおうという意味でも、集まれる場所や、学生がやりたいと思うことを叶えられる場所を作りたいと思っている。 例えば、最近聞いた話では、バンド活動をできる場所（楽器のあるスタジオ）が桐生市にはない。音楽室のような場所はあるが、ピアノしかなく、ドラムなどはない。 都内のユースセンターに行くと、バンドセットのある部屋が何か所かあり、それを使いたくてユースセンターに登録している若者がたくさんいるそうである。そういうユース世代がほしいもの、あったらいいなと思うものをユース世代から聞き取っていききたい。たぶん、使わないドラムセットを家に眠らせている人はどこかにいると思う。わざわざ買わなくても、ドラムセットを寄付してくれる人を探せば、くれる人は見つかると思う。 ユースの声が聞こえてくる環境づくりも大事だと思う。声を聴き、皆に呼びかけてみるという機能があるだけでも、若者にとって、自分の居場所ができたという感覚が生まれ、その後の地域への愛着も高まっていくと思うので、保育や学童だけではなく、中高生や大学生と地域との関わりも増やしていけたら良いと考えている。
(意見)	私からは3つある。 1つ目は、特色ある教育はすごく難しい。妻からこれだけは言っておきたいと頼まれたのだが、我々が特色ある教育だと思っていることでも、全国的に見た場合には特色に映らないこともあるので、本当にそこを目指すのか、あるいは、先ほどの建物の話もそうだが、何か違う形で知ってもらう機会を作るのか。 桐生市は表現するのがすごく難しいまちだと思う。例えば、黒保根学園では帰りの時に、先生たちが一列に並んで、旅館のお見送りのようにスクールバスを見送る光景が見られる。すごい画だと思うが、それを全国にアピールしたところで、それを求めて桐生市に来てもらうことはなかなか難しい。実際に来てみれば、すごく丁寧で細やかであり、本当に人生を豊かにしてもらえるのだが、そういうスペック・特徴だけで推し進めていくのは、やりたいことではあるのだが、すごく難しいもどかしさがある。それを諦めずに、どうにかして出していく方法を考えたい。 2つ目は、金井先生の意見にもあったが、桐生市には保育園や学童などの子育て環境をお試しする機会がない。お試し期間を設けて、保育園に預けている間に市内を見て回れるとか、子どもを環境に慣らしつつ、親は桐生市を体験できるような、短期留学的な仕組みが必要だと思う。

	特にハイブリッドワーカーの方は、自立していて色々と余裕のある方が多い。そういう方を引き寄せる時に、移住してくださいとか黒保根のひまわり団地に家を建ててくださいと言っても、いきなりは不安なので、まずはお試しとして少しステップを踏ませてもらえると、桐生市に来てもらえる可能性は増えると思う。 3つ目は、原体験をつくるのが大事だということ。私は、中高生時代に桐生市に絶対に戻ってこようと決めていたが、そう思ったのは街での原体験があったからである。 私が高校1年生の時に、第1回目の有鄰館演劇祭があり、親が申し込んで参加したのだが、その中で、街の人とすごく濃く繋がる体験をした。それはとても贅沢な体験であるが、ものすごくハイスペックだからとか、お金があったからできたというわけではない。参加したきっかけは自分の意思ではなく、親が申し込んだからであるが、それは全然構わないと思う。そういう、街を面白いと思う機会が今はあまり無いと感じるので、原体験をいかに作れるかだと思っている。桐生市を濃く感じるような経験が積み重なっていけば、外に出た後も桐生市のことが気になり、ふるさと感じやすいと思う。私は、一度桐生市の外に出た方が良いという考えを持っているが、そういう体験の積み重ねがあれば、必ず戻って来ると思うので、原体験は重要である。
(意見)	私は、桐生市に移住する前に、フィンランドに留学していた期間がある。桐生市に惹かれた理由は、フィンランドに似ていると思ったからである。フィンランドは教育大国と呼ばれ、世界トップレベルに学力が高いが、人口はわずか550万人で、首都のヘルシンキでも60万人台しかない。 ヘルシンキは桐生市のような街であり、美しい自然や歴史、デザイン、ファッションなどの魅力が詰まっている。そのヘルシンキで凄いなと思ったことは、どの年代の人と会話しても、必ず全員が英語を使えるということ。教育が平等に与えられていることに衝撃を受けた。 桐生市だけではなく日本全体が少子化で人口が減っている中で、私が思うことは、桐生市はフィンランドに似ている部分があるので、フィンランドの良いところを取り入れた街になってほしい。日本人は北欧がすごく好きであり、北欧の雑貨がよく売れ、フィンランドにも日本人旅行客がたくさんいる。 これからは生き抜く力が必要な時代である。私の親の世代は、大企業に入って、決められたフォーマットに従っていれば安定した生活を送れていたが、それが今後通用しなくなり、どんな社会の変化が起こっても生き抜いていく力が、これからの子どもたちには必要だと思う。 教育に柔軟性を持たせ、先生以外の人でも先生になれる、熱心な人が教育を仕事にできる、学校以外でも何かを学ぶことができる環境が増えてほしい。私も先生の資格を持ってはいないが、教育に関わり、仕事にできたら良いなと思っている。 フィンランドの話ばかりになるが、何故学力レベルが高いのかと不思議に思い、話を聞いてみると、一つには、一人ひとりの自主性を伸ばすことに力が入っており、遊びから出た学びが多いのだそうである。木登りしたい子がいたら放置し、登った先に虫がいたとか、どういう葉っぱがあったとか、自分で道を切り開いて発見する経験を重ねさせ、自走する力を伸ばしている。それにより、小さなことでも幸福を感じられる国民性が育っている。

	私がフィンランドも桐生市も気持ちいいと感じるのは、そこに共通点があるからだと思う。地方ならではの素晴らしい視点があり、ゆったりと生きられることが幸せで、自分らしくいられ、日々の中にも小さな幸せの発見がある。そういうことがもっと桐生市でできたら良いと思う。
市長	各々の意見を聴かせていただき、感謝申し上げます。 人口減少社会が悪いとか、人口が減るから街が衰退するとか、そうではなく、人口が減ることを前提とし、いわゆるダウンサイジングの中で、どうすれば桐生市の資源が生かされ、持続可能なまちであり続けられるかということだと考えている。 例えば、先ほどの話にあったフィンランドや、桐生市の産業のモデルになっているイタリアのフィレンツェがそうである。小さな都市でも生産性を高めて、どこにも真似できないようなものを作って世界に発信していき、そこにデザイナーや職人が集まるという街ができている。 人口だけに囚われて、その数字が減っているから桐生市はもう駄目だと悲観するのではなく、皆と一緒にそうではないという共通意識をもって、新たにスタートする形を取れば良いと思っている。

(3) その他（結婚・暮らしなど）

(意見)	私の子どもが高校生になる時、それまでの私の背中を見ていたからなのか、急に建築をやりたいと言うようになった。工業高校に進学したが、高校1年生の時に、建築への興味がなくなり、結局、酒造りの学校に進み卒業し、山梨県内で就職した。 高校生の時に反抗期があり、「桐生には絶対に帰ってこない」、「親と離れて暮らしたい」、「桐生には何もないし、どうでもいい」と言っていた。私は桐生市がすごく好きで、色々な会合に参加し話を聞いて、より一層桐生市を好きになったので、子どもにも桐生市を好きになってもらいたくて、桐生市の良さを刷り込む教育をしていた。学校や就職活動などで子どもの心が少し弱った時には、桐生市の良さを更に刷り込んだ。 そうしたことが功を奏したのか、今の子どもが目標が、30歳まで頑張って勉強をして、30歳になったら桐生市に帰ってきて酒の仕事をするに変わり、頑張ってくれている。 親が桐生市を好きであるということが非常に大切である。桐生市の良さを子どもに伝えると、子どもも桐生市を好きになってくれる。
(意見)	私も全く同じ意見である。 ただ、親のほとんどは桐生市を悲観的に思っているので、桐生市を好きな人たちのところに強制的に集まり、接点を持てる場をやはり作った方が良い。 もう一つ、他の地域で聞いた話だが、ある地方都市に行って駅で降りて、タクシーに乗る時に運転手におすすめの食べ物やお店を聞いたところ、「この街には何もない」と返って来たという。 これは非常に問題で、何か1つおすすめの紹介をできるようになるだけでも良いので、市民全員で同じことをやった方が良いと思う。 「何もない」、「仕方ない」と言う人ばかりなので、そういうネガティブなことを言わず、ポジティブな発言をできるように、市民の意識改革をしていくことが必要。

(意見)	地元の甲府市に帰省したときに思ったのだが、甲府市民は子どもを連れていてもほとんど声をかけてくれず、遠目で見ている人が多い。一方、桐生市民はすごく声をかけてくれる。子どもが勝手に走り出しても追いかけてくれたりとかして、桐生市民の温かさを感じる。 私は介護業界で働いているので思うことだが、女性や若者だけでなく、高齢者も巻き込んで、高齢者の技術とか昔の遊びを教えてもらえる場を設けることも必要だと感じる。妻に先立たれて一人になるなど、寂しい思いをしている高齢者は割と多いので、ボランティアなどで子どもと関わってもらう機会を作るのも良いと思う。
市長	色々なご意見をいただき、感謝申し上げます。我々にとって、非常に参考になり、これから政策を検討していくヒントになった。 引き続き、皆で一緒に考え、一緒にこの街を作っていきたい。そういう姿を市民に見せ、伝え続けていきたい。 交流したり、時には教えてもらったり、色々な形の中で色々な人と関わり合いを持つような取組をこれから作っていきたい。 人口減少による課題は様々あるが、決してそれだから桐生市が駄目になっていくという意識だけは持たないようにして、皆で大好きなこの桐生市を、これからも一緒に元気にしていければと思うので、今後も力を貸していただきたい。

5 閉 会 [終了：午後 8 時]